

平成25年度 東京都人権教育研究協議会「発達障害と人権教育」①
大正大学人間学部教授 玉井邦夫

～特別支援教育と子ども虐待の関連を踏まえて～

基本は、学級をどう作るかである。学級づくりがベース。

発達障害は「リスク」として捉えるべきである。

能力の偏り、得意不得意、好き嫌い、それは誰にでもある

但し、それを「個性」と括ってすませるには、あまりにもリスクの高い人たちが存在する。

リスクは、単に能力の高低では決定されない。

カバーできるかわりと、カバーできないかわりがある。

I 発達障害と子ども虐待

1 つながりを理解する視点

- (1) 「子どもに発達障害がある」ということが保護者の育児負担を増悪させるという視点
- (2) 虐待を受けた子どもの示す言動が、発達障害をもつ子どもの言動と似てくるという視点
- (3) 保護者に発達障害と思われるような特徴があることが、意図の善意を問わず子どもの養育を虐待的なものにしてしまう、という視点

2 虐待か発達障害か、という鑑別の問題

- (1) このような鑑別はどこまで現実的か？
- (2) 「子どもの発達の資質（障害）か養育（虐待）か」という軸足は、ケースマネジメントの進捗とともに変動する

II しつけと虐待 ～世界と大人への信頼～

第677号にて

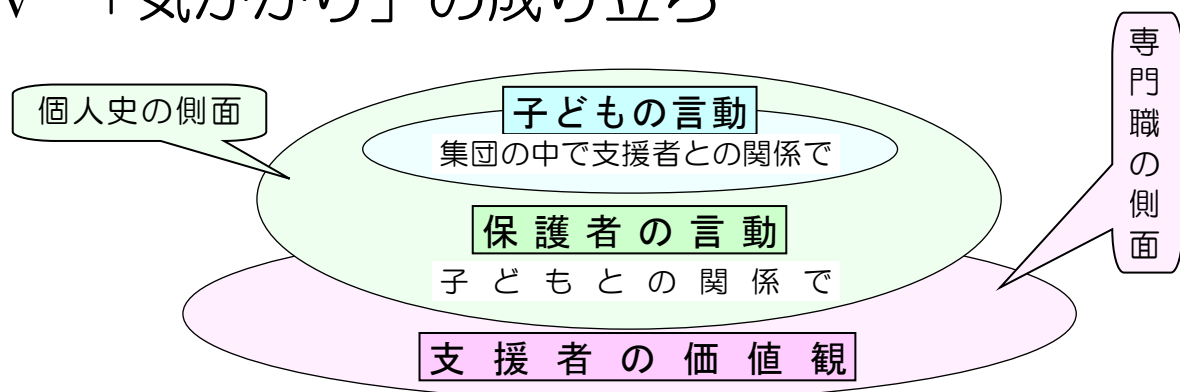
III ことば・気持ち・からだ ～乖離とPDD特性の類似性と対処～

第678号にて

IV こころとことばの育ちの課題

第679号にて

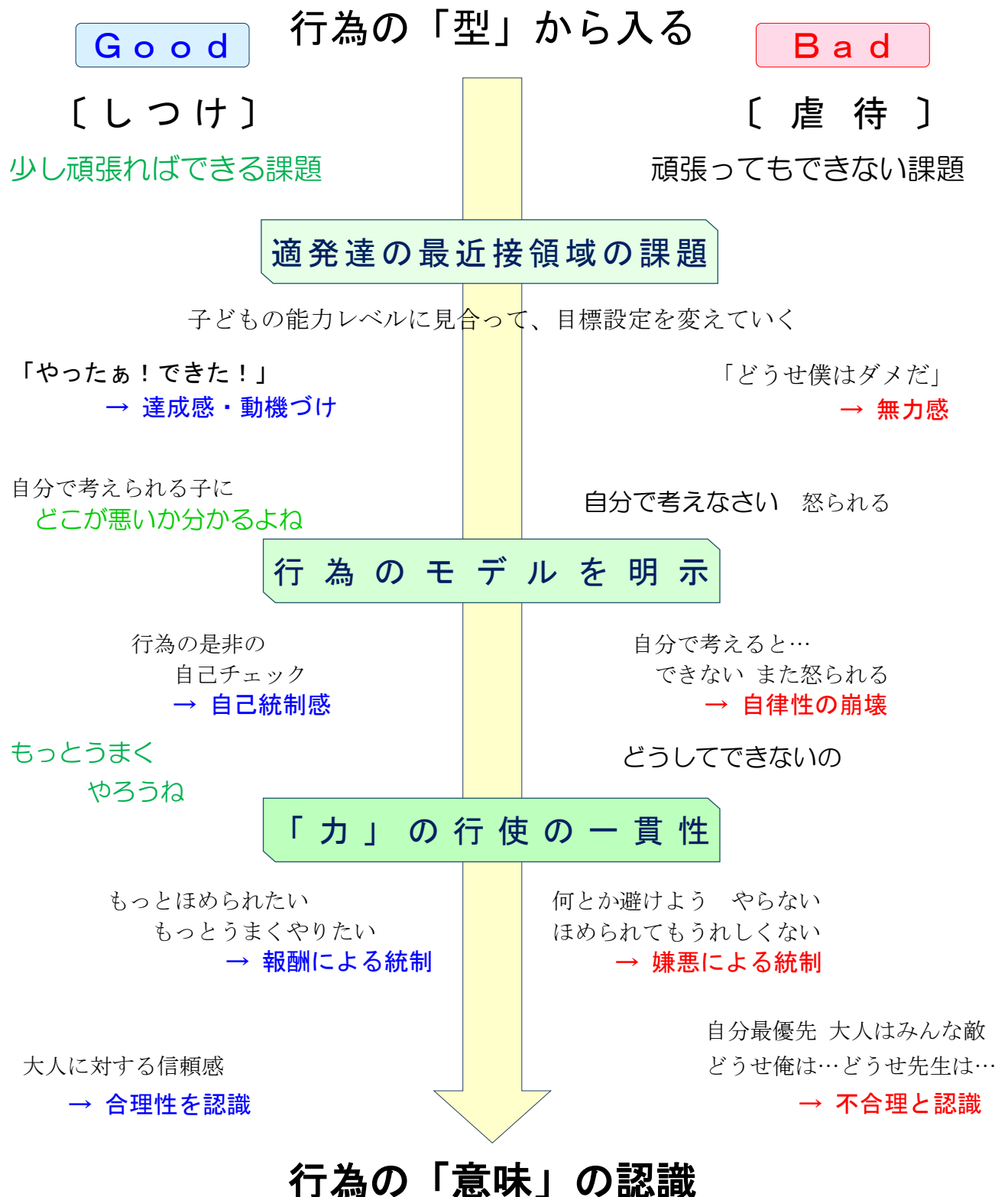
V 「気がかり」の成り立ち



× 個人は、常に「資質・能力」を問い

○ 職場は、常に「技術論」を問うこと

Ⅱ しつけと虐待 ～世界と大人への信頼～



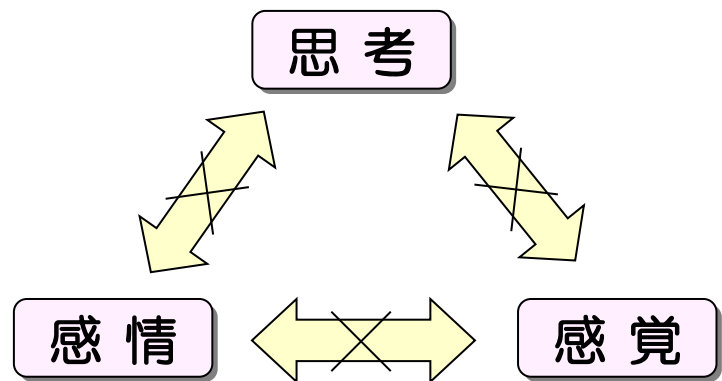
平成25年度 東京都人権教育研究協議会「発達障害と人権教育」③

大正大学人間学部教授 玉井邦夫

Ⅲ ことば・気持ち・からだ

～乖離とPDD特性の類似性と対処～

「こころ」のバランスを支えている3つの柱



(虐待などの) 強いストレス → さらに強いストレスを受け続ける

まず ⇒ 自分の“感覚”を無意識に切り離す（感覚を無くす）

※ 親から殴られ続けている自分の姿を、幽体離脱のような感覚で、上から眺めている自分

→ 痛みが分からない（人の痛みもわからない人間になる）

→ **感覚というアラームがないので、すぐキレル**

次に ⇒ “感情” “思考” を切り離す

※ 相手の言葉が通じない。言語能力が低いから自分でも説明できない。

→ 自分でもわからない

→ **オンかオフしかない** 突然暴れ出し、突然おとなしくなる

どこにアプローチするか 思考 or 感情 or 感覚

働きかけ方が、個によって違う！ どのような言葉をよいか。

- ・ 正常な状態の子 → 思考に働きかける「〇〇を〇〇しなさい」
- ・ 思考が働いていない子 → 感情に働きかける「どうしたいの？ 〇〇がしたいの？」
- ・ 思考も感情も働いていない子 → 感覚に働きかける「右の脚がバタバタ動いているよ」

Ⅳ こころとことばの育ちの課題

